



古田善伯
中部学院大学 学長

ふるた・よしのり氏

- 1947年 生まれ。
 - 1970年 東京教育大学体育学部卒業
 - 1972年 東京教育大学大学院体育学研究科体育学専攻修士課程修了
 - 1972年 東京教育大学助手 体育学部附属スポーツ研究施設
 - 1976年 東京教育大学講師 体育学部附属スポーツ研究施設
 - 1977年 筑波大学体育科学系講師
 - 1977年 岐阜大学教育学部助教授
 - 1992年 岐阜大学教育学部教授
 - 2000年 岐阜大学評議員
 - 2004年 岐阜大学教育学部長
 - 2008年 岐阜大学理事・副学長、教養教育推進センター長
 - 2013年 4月より現職
- 専門は体育学、運動生理学。体育修士。医学博士。

実学・実習の伝統を人材育成や地域発展に活かしたい

1918年(大正7年)に設立された岐阜裁縫女学校が本学の起源です。創立者である片桐竜子は、日本の平和、世界の平和を祈念して止まない人物でした。女性がもっと活躍するようになれば、社会平和が実現するのではないかと。そう考えたものの、女性が自由に教育を受けられない時代。ならば、まずは女性の自立を支援しようと、裁縫学校を始めたのです。

後継者の片桐孝は、キリスト者でした。第二次世界大戦後の焼け野原の中、一人ひとりを心から大切にす学校として、また実践を重んじる学校として、さらなる高みを目指すという覚悟をもってキリスト教主義を教育の基盤に据えました。「神を畏れることは知識のはじめである」という建学の精神は、旧約聖書に基づきその時に定めたものです。

個別面談で就職率100%に

本学はこのところ、「就職率の高い大学」として雑誌、新聞などに取り上げていただく機会が増えました。昨年度は大学開学以来初めて、「就職率100%」(2013年度卒業生就職決定者数259名)を実現しました。短期大学部は、10年以上連続「就職率100%」(2013年度卒業生就職決定者数165名)を達成しています。

様々な取り組みが実を結んだ結果だと思いますが、大きな理由のひとつは、「個別面談」の強化です。キャリア支援センターが中心となり、全学科の学生を対象にして、一人当たり平均15回以上の面談を重ねています。時間をかけることで個々の学生の能力を再発見できたり、自己PRに磨きをかけることができます。教員と職員の連携や情報共有も緊密です。不採用でがっかりしている学生に対しても教職員共々励まし、次に向かえる勇気や自信を与え、また背中を押してあげるようなことができていると思います。

就職に強いもう一つの理由は、「実習」です。創立以来「実学」を重んじる伝統のなか実習に力を入れてお

り、「実習に強い」大学という評価もいただいています。わざわざ本学の実習を見学に来られる大学もありますし、実習に強いから本学を選んだという学生もいます。本学には人間福祉学部、子ども学部、看護リハビリテーション学部、経営学部があり、各々の関連資格を取得する際に実習が義務づけられています。約400の機関や施設、病院などと実習の契約を結び、その連絡調整のために「実習センター」も設置しています。

本学の実習に特長があるとするならば、それは実習先との間に、Win-Winの関係を築こうとしているところでしょう。実習は実習先に多大なる負担をかけるものですが、先方が負担感のみで終わるようなものは望ましくありません。実習を契機に職員教育を行うなど、組織の見直しの機会になれば先方のメリットにもなります。そうしていただくように、年に数回は実習先とミーティングの機会をもち、活発な意見交換をしています。本学全体で「キャンパスに現場あり、現場にキャンパスあり」が合言葉となっており、実習で磨かれる力や、実習を通じて培った先方との関係性が就職にも活かしているように感じます。

地域の要望で設置した学部学科

実習などを通じ、「地域」が学生を育ててくださっていると日々実感しています。地域との関わりなくして本学を語ることはできません。2006年に新たに設置した各務原キャンパスは、地域の要請によるものです。学部学科も地域の要望により設けたものが多くあります。例えば、理学療法学科や経営学科、また来年度から設置する看護学科などは、地元の病院、施設、企業、自治体の要望に本学が応えたものです。特に看護学科は、この地の看護師不足から非常に待望されていました。これにより介護福祉士、社会福祉士、理学療法士などと共に看護師や保健師も養成することになり、「チーム医療」のスタッフを本学が育成していくこととなります。

こういう形で地域に貢献できることも、誠に光栄に感じております。

今後の大学経営を考えますと、東京オリンピックが開催される時期あたりを境にして、18歳人口がさらに減少していくことが最も気がかりです。そのころまでに教育力をもう一段、二段と向上させる必要があります。私としては、学生に「主体的に考えながら自立して学習する力」を身につけてもらいたい。そのための仕組みとして、近々「アクティブラーニング」を盛り込んだ新カリキュラムを各学部で導入する準備を進めています。例えば、経営学部では、かなり長期のインターンシップの導入を計画しています。

学園創立100周年、大学開学20周年に向けて

本学には通信教育部があり、老若男女が資格取得などを目指し、非常に熱心に学んでいます。今後はスクーリングが減り、インターネットが主流になります。いつでも、どこでも、誰でも勉強できるため、通信教育はますます発展していくでしょう。本学もその波に乗り遅れないよう、さらなる改良やチャレンジを行ってまいります。

広報戦略としては、まだまだやるべきことがあると思っています。私は本学に来てまだ1年ですが、この大学の雰囲気の良いことや、教育内容の充実ぶりが社会に十分に伝わっているとは思っていません。大学全体の認知度をさらに上げ、明るいイメージが定着していくようなブランド戦略も考えていくつもりです。

本学は2017年に創立20周年の時を迎えます。同時にその年、短期大学部は創立50周年。そして2018年は、学園創立100周年。輝かしい教育実績をあげるなかで、これら記念すべき瞬間を迎えることができたならば、それ以上のことはありません。それを目指し、目の前の仕事に全力で取り組んでいくことが、学長としての私の責務と考えております。

